



大阪大学大学院人間科学研究科

附属

未来共創センター

年次報告書 2020

Annual Report 2020

未来共創センターとは？

人間科学部は、人間についての理解を深め、人間とは何かという根本的課題と人間が営む現代社会の多様な課題を総合的・学際的に探究し、時代の要請に応えることのできる新しい学問分野の創造を目指して、昭和 47 年（1972 年）に、「人間科学」の名称を掲げる日本での最初の学部として創設されました。人間科学部・研究科の掲げる「現場に寄り添い、課題を探り、その課題解決に向けた学際的な視点からの研究活動の成果」を学内外に発信しながら、人間科学研究科と外部の結節点となることを目指した附属未来共創センターが 2016 年 4 月にスタートしました。研究科内の教員、学生の多様な出会いと連携を生み出し、新たな学問領域の開拓を支援することも、当センターの目的です。そして、これらの活動を通して、学部学生・大学院生に向けて多様な学びの場を提供することも目指しています。さらに、2017 年度からは OOS(大阪大学オムニサイト) 協定を軸とする社会学連携活動も開始し、2020 年度には 19 を超える協定が生まれました。これまでのセンターの活動が、「研究成果の社会発信」を主に目指すものとするなら、OOS による連携・協働活動は、「社会の諸アクターとの協働を通じた共創知の創出」を試みるものです。OOS が創出する様々な「場」で人々が出会い、共感し、共生の輪が広がることを目指しています。

多様な活動を通して 社会への貢献をめざします

オリジナリティあふれる多様な活動を発信し社会貢献をめざしています。

◇人間科学セミナー／出張授業

大学内で、または大学の外で、人間科学の教員が研究成果を発信するセミナーや講義をしています。

◇まなびのカフェ

参加者とともに語りあう、交流型の学びの場です。教員が外に行くだけでなく、外部のパートナーが大学に来て共にまなぶ場を、気軽なカフェとして実施します。

◇「シリーズ人間科学」の発刊

研究内容を一般にも分かりやすく発信する本として、人科の教員がテーマに合わせて共同で執筆しています。これまでに「食べる」「助ける」「感じる」「学ぶ・教える」「病む」「越える・超える」の 6 冊が発刊されています。

◇ジャーナル『未来共創』の発刊

最新の研究や活動報告をまとめたオンラインジャーナルを、年 1 回発刊します。

大学らしい「共創の場」から 共創知をうみだします

大学における学びや研究を充実させ、多様なアクターとともに新しい「知」をうみだします。

◇研究会の運営

大学外からも参加可能な「共創知研究会」を主催しています。また、テーマを定めた研究会も実施しており、2019 年度は「インクルージョンと共生」、2020 年度は「レジリエンス」をテーマに多分野の教員・学生が議論を重ねました。この研究会からの成果は特集論文として、ジャーナル『未来共創』を通じて発信していきます。

◇ランチトーク／ナイトトーク

学生主催のイベントです。「表現の自由」「ジェンダー」「外国人と多様性」「大学教育とは？」など、今注目される話題を中心に大学院生・学部生が話題提供し、熱い議論が繰り広げられています。

◇OOS 協定

産官社会学連携により、人間科学の教員とパートナーとともに、学内外のセミナーやイベントの「場」、企業・財団・社団・地方自治体・NPO/NGO などの活動の「場」を支援・活用し、共創知をうみだします。

目 次

はじめに	1
I 未来共創センターの概要	
1. 設立の経緯と背景	2
2. 活動目的と概要	3
3. 運営体制	3
II 活動報告	
活動概要の一覧	4
1 センター主催のイベント	
1.1 人間科学セミナー	9
1.2 まなびのカフェ	12
1.3 ランチトーク	15
2 OOS	
2.1 OOS 協定	17
2.2 OOS 関連イベント	17
2.3 OOS シンポジウム	21
2.4 Student's Voice	22
3 オープン・プロジェクト	
3.1 オープンプロジェクトの活動	24
4 研究事業	
4.1 研究会の運営	29
4.2 ジャーナル『未来共創』の発刊	30
5 教育事業	
5.1 未来共創センター担当授業	31
5.2 シリーズ人間科学の発刊	32
5.3『私の一冊』の発行	32
6 その他の活動	
6.1 オンライン出前授業	33
6.2 センターの活動を紹介する本が 出版されました	35
6.3 阪大写真洗浄のつどい	35
6.4 大阪大学賞を受賞しました	35
III 未来共創センターの活動に 関わった皆さんの声	
恒川 あい 佐々木 美和 杉浦 万正 富安 皓行	36

はじめに

コロナ禍の中、未来共創センターとしてさまざまな新しい経験を積みながら、1年間の活動を終えました。センターとして設立5年目にあたる2020年、コロナ禍で対外的な活動が抑制される1年ではありましたが、組織の再編や制度の整備などに時間を費やすこともでき、悪いことばかりではありませんでした。制度的な変更も含めて1年間のご報告を申し上げます。

未来共創センターは、当初より、高校、企業、行政、NPOなど、社会のアクターとの連携を目的に設立され、社会と共に歩み、未来を創るという理念においては何ら変更なく活動が続けていますが、組織のあり方を少しスリムにし、より実質的な活動に必要な組織形態を目指して、再編を行いました。

志水宏吉前センター長時代に導入された「ラボ事業」を引き継ぎ、名称を「オープン・プロジェクト」として研究科全体に社会学連携の機運を広めるべく制度を整備しました。幸い、研究科内の全学系から10件の事業が申請され、それぞれユニークな取組が展開されています。「緒方洪庵」という、大阪大学にゆかりのお酒の製造もその中に含まれています。また、OOS（大阪大学オムニサイト）協定先も、19件に達し、今後ますますさまざまな社会的アクターとの連携が深まることと期待します。

コロナ渦中で、対面でのイベントの多くは中止ないしオンラインへの移行を余儀なくされましたが、その中でもOOSシンポジウムを始め、50件以上の事業を実施することができました。連携先のみなさま、関係する先生方、職員のみなさまのご協力なしには、実現できなかったものばかりです。センター・スタッフを代表しまして深くお礼申し上げます。2021年度は、コロナの呪縛から抜け出し、人との距離をいま少し縮め、みなさんと直接お会いできることを楽しみにしながら活動を続けて参りたいと考えます。今後とも、ご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2021年3月31日

未来共創センター長 山中 浩司

1 未来共創センター設立の経緯と背景

人間科学部は、人間についての理解を深め、人間とは何かという根本的課題と人間が営む現代社会の多様な課題を総合的・学際的に探究し、時代の要請に応えることのできる新しい学問分野の創造を目指して、昭和47年（1972年）に、「人間科学」の名称を掲げる日本で最初の学部として創設されました。4年後には大学院も設置され、当初から設置されている人間科学専攻（4学系：行動学系、社会学系、人間学系、教育学系）と2007年に大阪大学と大阪外国語大学の統合によって設置されたグローバル人間学専攻（1学系：グローバル人間学系）の2専攻5学系体制で、教育研究を展開してきました。

しかしながら、現代社会の急激な構造変動とそれに伴う人間生活の本質的な変化の中で、人間科学部・研究科が創設以来、最重要視してきた「自らの専門領域を深化させながら、俯瞰的な視点を持って、異なる学問領域との多様な連携と融合を実践する学際的な教育・研究活動」をさらに推し進めなければならないと認識するに至りました。そのために、新しい枠組みが必要であると、私たちは結論しました。

そこで、本研究科では従来の2専攻5学系体制から、1専攻4学系体制に改編することを決定しました。具体的には、人間科学専攻（行動学系、社会学系、人間学系、教育学系の4学系）とグローバル人間学専攻（グローバル人間学系の1学系）の2専攻を、人間科学専攻（行動学系、社会学・人間学系、教育学系、共生学系）の1専攻にしました。

新組織としての人間科学専攻には、新しい学問領域としての「共生学」の開拓を目指して、従来の5学系の教員が参集して「共生学系」を創設します。今日の多様化する社会においては、紛争、大規模災害、環境汚染、貧困、高齢化、格差などあらゆる問題が生じ、人々の間に、あるいは社会に様々なレベルでの軋轢を生みだしています。それゆえに、「人種、民族、言語、宗教、国籍、地域、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、病気・障がいなどの違いを有する人々が、その違いを認めながら、共に生きること」である「共生」を学際的に研究する「共生学」の構築を、本研究科は目指すことになりました。

本研究科は、従来から、国内外の大学や研究機関との国際共同研究や、学内の他部局との共同研究を積極的に展開し、「現場に寄り添いながら、文理融合的で学際的な研究活動」を展開してきました。この機能を一層強化するため、今回の新体制への移行に際して、本研究科と大阪大学他部局、国内外の大学・研究機関、NPO・NGO等多様な団体、さらには市民社会をつなぐ「結節点」として、本研究科内に「未来共創センター」を新たに設置しました。



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 未来共創センター

2 活動目的と概要

本センターは、本研究科教員の個別の学問領域における研究の機能強化だけでなく、異なる研究領域の研究者との接触や協働を通して、新たな融合的学問領域の展開と、国内外の現場に寄り添った実践的な教育研究活動の実現を目指します。

学部学生や大学院生は、本センターが企画・運営する公開講座、セミナーやまなびのカフェ、さらに学術図書の企画・出版等の事業に参加することで、研究成果の一般社会への還元方法やコミュニケーション力・対話力の向上、及びプロジェクトの企画・運営能力などの実践的能力を身に付けることが期待できます。さらに、2017年度からはOOS（大阪大学オムニサイト）協定を軸とする学学連携活動も開始し、「社会の諸アクターとの協働を通じた共創知の創出」を目指しています。

◎ 2020年度に実施した未来共創センター組織変更などについて

2020年度には組織構成その他下記の様な変更を行いました。変更の経緯を明確にするため、ここに記します。

1) 教員の配置換えについて

2019年度まで、未来共創センター専任教員として岡田千あき准教授、中野良彦准教授が勤務していましたが、部内の組織再編に伴い岡田准教授は教育学系、中野准教授は行動学系の専任教員となり、未来共創センターについては兼任として勤務することとしました。

2) 組織再編について

これまで、部内の「国際交流室」「学生支援室」「サイバーメディア室」「教育改革推進室」「研究推進室」の5室は、未来共創センターのもとに編成されておりましたが、これら各室の独立性や業務を考慮し、2021年度よりセンター組織より独立することとしました。なお、「未来共生イノベーター博士課程プログラム部門」につきましては、業務の関連で引き続きセンター組織内に設置することとしました。

3) センター内の会議運営について

上記の組織再編に伴い、従来上記5室の代表とセンター関係者で構成されていた「センター会議」を廃止し、部内各学系の教員からなる「未来共創センター運営委員会」においてセンターの重要事項の審議を行うこととしました。

4) 「ラボ」事業の名称変更について

2019年度末に予告し、2020年度年初から募集を行いました「未来共創センターラボ事業」について、「ラボ」という名称の使用について種々の意見交換を行い、今後は「オープン・プロジェクト」という名称での募集を行うこととしました。

3 運営体制（2020年度）

《未来共創センター構成員》

未来共創センター

山中 浩司 教授 [センター長] (兼)	稲場 圭信 教授 (兼)
渥美 公秀 教授 [副センター長] (兼)	河森 正人 教授 (兼)
澤村 信英 教授 [副センター長] (兼)	栗本 英世 教授 (兼)
岡田 千あき 准教授 (兼)	白川 千尋 教授 (兼)
中野 良彦 准教授 (兼)	高田 一宏 教授 (兼)
杉原 薫子 特任准教授 (2020年7月まで)	中道 正之 教授 (兼)
恒川 あをい 特任准教授 (2020年10月～2021年3月まで)	岡部 美香 教授 (兼)
山本 晃輔 講師 (2020年12月まで)	森田 敦郎 教授 (兼)
木村 友美 講師	石蔵 文信 招へい教授
川淵 千恵子 特任事務職員	織田 和明 特任研究員

未来共生イノベーター博士課程プログラム部門

榎井 縁 特任教授	平尾 一朗 特任助教
MELLUER Stephen 特任講師	鈴木 ひでみ 特任事務職員
神田 麻衣子 特任講師	亀岡 美穂 特任事務職員
石塚 裕子 特任講師	

Ⅱ 活動報告

活動概要の一覧

2020 年度 未来共創センター活動の概要

未来共創センターでは、様々な「社会とつながる」交流の場づくりを行ってきました。2020 年度は、新型コロナウイルス感染症の影響で、様々なイベントがオンラインでの開催となりました。皆で一緒の場に集まることが難しい状況下において、多様な工夫をこらして、交流や発信を続けてきました。

下記は、2020 年に実施した活動の一覧です。

1 センター主催のイベント →詳細は P9 へ

◆ 1.1 人間科学セミナー

大阪大学人間科学研究科の教員らによるセミナーで、一般にも広く公開しています。今年度は、第 41 回から第 46 回までの 6 回のセミナーが開催されました。

日付	タイトル	演者所属	氏名
2020 年 11 月 26 日	第 41 回 新しい能力、新しい大学入試、新しいコロナウィルスの流行、 新しい学習塾はどこに向かうか	株式会社誌私塾界 / 全国私塾情報センター	山田 未知之
2020 年 12 月 3 日	第 42 回 私立大学のマネジメント 社会的課題を踏まえた戦略と経営	関西国際大学長	濱名 篤
2020 年 12 月 10 日	第 43 回 発達早期の社会的認知	人間科学研究科 比較発達心理学	鹿子木 康弘
2020 年 12 月 16 日	第 44 回 多様な人材が自分らしくチャレンジし活躍できる会社づくり ～ダイバーシティ&インクルージョンの深化～	NTT 西日本 / 人間科学研究科 附属未来共創センター	恒川 あをい
2020 年 12 月 17 日	第 45 回 ノルウェーの多文化主義と教育課題	人間科学研究科 生涯教育学	北山 夕華
2021 年 2 月 27 日	第 46 回 人間科学セミナー「サルと人間科学 自然からの贈り物」	人間科学研究科 比較行動学	中道 正之



◆ 1.2 まなびのカフェ

参加者とともに語りあう、交流型の学びの場です。2020年度は、箕面市国際交流協会と共に、オンラインで実施できるイベントを企画・実施しました。

日付	タイトル	演者所属	氏名
2020年 11月28日	まなびのカフェ	箕面市国際交流協会 人間科学研究科	ゼア・ローズ、クラウド・エリウス・ オセグダ・フィゲロア、坂口ピーター、 小笠原理恵、木村友美

◆ 1.3 ランチトーク／ナイトトーク

学生主催のイベントです。「実践と研究」「大学教育とは?」「復興と記憶」など、今注目される話題を中心に大学院生・学部生が話題提供し、熱い議論が繰り広げられました。

日付	タイトル	テーマ	話題提供者
2020年 7月21日	ランチトーク 共生と共創	共生と共創	栗本英世、八木景之、織田和明
2020年 10月28日	ランチトーク 学習・研究のヒント	大学における 学習と研究	井上 瞳、眞田 航、倉田和佳、 梶 健太
2021年 3月27日	ランチトーク特別編 記憶と風化そして復興『復興のための記憶論』 をめぐって	復興・記憶・ 写真	宮前良平、岡部美香、佐々木美和、 富安皓行



2 大阪大学オムニサイト協定 OOS →詳細は P17 へ

大阪大学オムニサイト協定 OOS は、人間科学研究科および協定を締結した組織が主体となり、様々な活動・交流を行いました。

◆ 2.1 OOS 協定 2020 年の新規協定件数： 1 件

2020 年度の新規協定件数 1 件 一般社団法人地域情報共創センター

2019 年度までに締結された協定（締結日順）

一般社団法人全国自治会活動支援ネット

一般社団法人全国寺社観光協会

一般社団法人今井町大和観光局

岩手県九戸郡野田村

パナソニックホームズ株式会社（旧パナホーム）

新安世紀教育安全科技研究院

NPO 法人北いわて未来ラボ

NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク

ジャトー株式会社

NTN 株式会社

ダイハツ工業株式会社ダイハツ保健センター

一般社団法人タウンスペース WAKWAK

大阪市教育委員会

共和メディカル株式会社

中銀インテグレーション株式会社

西予市野村地域自治振興協議会

愛媛大学社会共創学部

NPO 法人おおさかこども多文化センター

◆ 2.2 OOS 関連イベント

日付	タイトル	実施・主催	場所
2020 年 7 月 12 日	新型コロナウイルス感染症 災害ボランティアラの試み	大阪大学人間科学研究科 災害ボランティアラボ	Zoom
2020 年 7 月 15 日	新型コロナウイルス感染症 災害ボランティアラのリスク管理	大阪大学人間科学研究科 災害ボランティアラボ	Zoom
2020 年 7 月 17 日	新型コロナウイルス感染症 感染を防ぐ「手指衛生」の極意とは	大阪大学人間科学研究科 災害ボランティアラボ	Zoom
2020 年 11 月 8 日	防災ピクニック	大阪大学人間科学研究科 災害ボランティアラボ	大阪大学吹田キャンパス

◆ 2.3 OOS センターシンポジウム

日付	タイトル	実施・主催	場所
2021 年 3 月 5 日	第 3 回 OOS シンポジウム	未来共創センターおよび OOS 協定先	Zoom

3 オープン・プロジェクト →詳細は P24 へ

2020 年度から、未来共創センターではオープン・プロジェクトが開始されました。学系間および他部局との協働を推進し、本研究化と社会の結節点としての社会学共創活動を展開することにより、共生社会実現に向けての実践的な教育活動を図るために設置されました。人間科学研究科内に社会との多様な結び目をつくり、あたらしい場を創っていくことを目指しています。2020 年度は 10 件のプロジェクトが採択されました。

	プロジェクト
1	Ethnography Lab
2	災害ボランティアラボ
3	心理・行動フォーサイトラボ
4	地方における人材共創プロジェクト
5	子どもの安全ラボ
6	障害ラボ
7	グローバルビレッジ・コミュニティ・プロジェクト (GCP)
8	マイノリティ教育ラボ
9	老いと死の研究ラボ
10	緒方らば



4 研究事業 →詳細は P29 へ

◆4.1 研究会の運営

2019 年度から、下記の 2 つの研究会をセンター主催で立ち上げました。研究会の活動を通じて、人科内での分野を超えた学際研究を推進し、共創センターのジャーナル『未来共創』の出版につなげることを目的としました。

【A. 共創知研究会（セミナー形式）】

「共創」「共創知」に関わる活動や研究をされている外部の講師に話題提供いただきました。

第三回共創知研究会 レポート

<https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/reports/210205154829/>

【B. テーマ研究会（勉強会形式）】

テーマを決めて、そのテーマに関心のある教員や学生を募集し、固定メンバーで 2 か月に 1 度ほど研究会を実施しました。2020 年度のテーマは、「レジリエンス」として、コロナ禍という背景も重なり、深く議論が交わされました。生物進化、保健医療、防災・復興、心理学、高齢者の健康、教育学等の観点から、多分野での意見交換がなされました。その後、研究会のメンバー 4 名が、ジャーナル『未来共創』の特集「コロナ禍に考えるレジリエンス」に寄稿しました。



◆4.2 ジャーナル『未来共創』の発刊

これまで第 6 号まで刊行されてきたジャーナル『未来共創』を引き継ぎ、名称を新たに、2019 年度よりジャーナル『未来共創』として刊行しました。2020 年度は第 8 号を発刊しました。

5 教育事業 →詳細は P31 へ

◆5.1 未来共創センター担当授業

◆5.2 シリーズ人間科学の刊行

◆5.3 『私の一冊』の刊行

6 その他 →詳細は P33 へ

1. イベント等

日付	タイトル	演者所属	氏名	場所
2020 年 5月1、2、3日	GW 特別ラジオ 人間科学ってどんな学問？	人間科学研究科	モハーチ・ゲルゲイ、 山本晃輔、木村友美 他、人間科学研究科有志	Zoom
2020 年 5月15、22、 29日	木村・モハーチの未来共創 カフェラジオ	人間科学研究科	モハーチ・ゲルゲイ、 山本晃輔、木村友美	Zoom



日付	タイトル	演者所属	担当教員	場所
2020年 6月27日	共に生きる不自由－表現者との対話 ワークショップ（第1回）	あいちプロトコル 人間科学研究科	石塚裕子	Zoom
2020年 7月11日	共に生きる不自由－表現者との対話 ワークショップ（第2回）	あいちプロトコル 人間科学研究科	石塚裕子	Zoom
2020年 7月22日	「共に生きる不自由」表現者と 研究者の対話から	人間科学研究科	石塚裕子	Facebook
2020年 8月8日	共に生きる不自由－表現者との対話 ワークショップ（第3回）	あいちプロトコル 人間科学研究科	石塚裕子	Zoom
2020年 8月19日	コロナ災禍における若者たちの 市民活動	人間科学研究科・未来共 生プログラム・災害ボラ ンティアラボ・マイノリティ 教育ラボ・障害ラボ	石塚裕子	Zoom
2020年 9月15日	阪大写真洗浄の集い	災害ボランティアラボ	宮前良平	E105
2020年 9月30日	阪大写真洗浄の集い	災害ボランティアラボ	宮前良平	E105
2020年 10月30日	福島は語る	未来共生プログラム 大阪大学社会ソリュー ションイニシアテック	石塚裕子	最先端イノベ ーションセン ター、Zoom
2020年 11月13日	ふくしまの復興の「今」を知る 学習会	未来共生プログラム 大阪大学社会ソリュー ションイニシアテック	石塚裕子	最先端イノベ ーションセン ター、Zoom
2020年 11月19日	福島スタディツアー	未来共生プログラム 大阪大学社会ソリュー ションイニシアテック	石塚裕子	福島県
2020年 11月25日	コミュニティ・ラーニング 2020 報告会	未来共生プログラム	渥美公秀、石塚裕子	ラーニング コモンズ
2020年 11月26日	大阪大学賞 大阪大学オムニサイト 協定とその関連事業の推進	人間科学研究科	山本晃輔	コンベンショ ンセンター
2020年 12月23日	ふくしまスタディツアー 2020 報告会	未来共生プログラム 大阪大学社会ソリュー ションイニシアテック	石塚裕子	ラーニング コモンズ

2. 出前授業

日付	タイトル	担当教員・学生	場所
2020年 11月5日	「食」のフィールド研究－ 人間科学からのアプローチ	木村友美、山本晃輔	大阪府立高津高校
2020年 11月7日	開いてみよう学問の扉、 見てみよう人間科学	山本晃輔、木村友美、織田和明、 大川和愛、西川可奈子	Zoom（全国29校）
2020年 12月18日	人間科学ってなんだろう	山本晃輔、木村友美	兵庫県立小野高校

3. 本の出版

未来共創センターの活動を紹介する本が発刊されました！

『共生社会のアトリエ — 大阪大学大学院

人間科学研究科附属未来共創センターの挑戦』

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター 編

2021年3月、大阪大学出版会



<詳しくは、P35 へ>

1 センター主催のイベント

◆ 1.1 人間科学セミナー

第41回 人間科学セミナー

新しい能力、新しい大学入試、新しいコロナウィルスの流行、 新しい学習塾はどこに向かうか

2020年11月26日(木)

社会から新しい能力が求められ、大学入試が、そして中等教育が変わろうとしています。この動きに真っ先に反応するのは塾業界ではないでしょうか。

現在、学習塾は、従前からある遠隔教育の充実のみならず、新しい能力育成にもたつく公教育の肩代わりとして、プロジェクト型学習や、ポートフォリオ作成、AIがサポートする自己管理的学習システムを導入するなど、大きな変革がなされつつあります。もともと学習塾は民間の教育サービスであり、学歴に直結しないために児童生徒は必ずしも登録し続ける必要はなく、学習者のニーズに敏感に対応する必要があります。少子化によって競争がさらに激化し、こぞって新しい入試形式への対応に取り組む中、さらに新型コロナウイルスの流行を受けた学習塾がどのように変化しているのかについて紹介していただきます。

大阪大学大学院人間科学研究科
附属未来共創センター
第41回人間科学セミナー

大阪大学大学院人間科学研究科
附属未来共創センター

新しい能力、新しい大学入試、 新しいコロナウィルスの流行、 新しい学習塾はどこに向かうか

社会から新しい能力が求められ、大学入試が、そして中等教育が変わろうとしています。この動きに真っ先に反応するのは塾業界ではないでしょうか。現在、学習塾は、従前からある遠隔教育の充実のみならず、新しい能力育成にもたつく公教育の肩代わりとして、プロジェクト型学習や、ポートフォリオ作成、AIがサポートする自己管理的学習システムを導入するなど、大きな変革がなされつつあります。もともと学習塾は民間の教育サービスであり、学歴に直結しないために児童生徒は必ずしも登録し続ける必要はなく、学習者のニーズに敏感に対応する必要があります。少子化によって競争がさらに激化し、こぞって新しい入試形式への対応に取り組む中、さらに新型コロナウイルスの流行を受けた学習塾がどのように変化しているのかについて紹介していただきます。

講演者

山田 未知之 氏

株式会社私塾界／
全国私塾情報センター
代表取締役社長、
社会情報大学院大学客員教授

第42回 人間科学セミナー

私立大学のマネジメント 社会的課題を踏まえた戦略と経営

2020年12月3日(木)

様々な社会的課題が山積する昨今。社会への優れた人材の輩出、知識基盤社会における地域社会の核としての役割など、大学は自らの価値や役割を考えたい一方で、経営戦略を策定し、そして実行に移す必要があります。

2020年4月、学校法人濱名山手学院は、日本初の学部譲渡による法人合併を行いました。組織体としての大学法人の動きは、国立大学法人も無関係ではありません。今回は濱名篤理事長・学長をお呼びし、このようなダイナミックな組織としての動き、そして教育の質的充実に向けての活動事例などを通じて、これからの大学経営の在り方についてご講演をいただきます。

大阪大学大学院人間科学研究科
附属未来共創センター
第42回人間科学セミナー

大阪大学大学院人間科学研究科
附属未来共創センター

私立大学のマネジメント 社会的課題を踏まえた戦略と経営

様々な社会的課題が山積する昨今。社会への優れた人材の輩出、知識基盤社会における地域社会の核としての役割など、大学は自らの価値や役割を考えたい一方で、経営戦略を策定し、そして実行に移す必要があります。2020年4月、学校法人濱名山手学院は、日本初の学部譲渡による法人合併を行いました。組織体としての大学法人の動きは、国立大学法人も無関係ではありません。今回は濱名篤理事長・学長をお呼びし、このようなダイナミックな組織としての動き、そして教育の質的充実に向けての活動事例などを通じて、これからの大学経営の在り方についてご講演をいただきます。

※本セミナーは、高麗製プログラム「大学マネジメント力養成・向上プログラム」が提供する「高等教育論講座II（担当：齊藤貴彦、川崎英）」の一つの講義として提供されています。



講演者

濱名 篤 氏

関西国際大学学長、
学校法人濱名山手学院理事長

第 43 回 人間科学セミナー

発達早期の社会的認知

2020 年 12 月 10 日 (木)

ヒトは社会的動物であるがゆえに、発達の初期からさまざまな社会的認知能力が備わっている。本講演では、講演者が行ってきた発達早期の社会的認知発達研究を紹介する。具体的には、まず、他者理解の前駆体とされる他者の行為理解に関する知見を紹介する。次に、その行為の社会的な文脈での意味や価値を問う、他者の行為の道德判断に関する研究を紹介する。最後に、乳児の社会的学習に関する知見も紹介し、発達早期における社会的認知能力の全容を浮き彫りにしたい。



講演者

鹿子木 康弘 准教授

行動生態学講座

第 44 回 人間科学セミナー

多様な人材が自分らしくチャレンジし活躍できる会社づくり ～ダイバーシティ&インクルージョンの深化～

2020 年 12 月 16 日 (水)

企業において、多様性（内面の違い）を互いに認め、一人ひとりが、自分の個性を活かしチャレンジしていくことは、社員の働きがい向上と企業としての成長・発展につながる重要な鍵と言えます。

ダイバーシティについては、この 10 年、障がい者雇用や女性活躍推進を中心として様々な取り組みが進み、雇用環境含め働きやすい職場づくりは一定の成果を得ました。NTT 西日本でも、ライフにおける様々な事情により自身のキャリア継続やチャレンジを諦めることが無いよう、様々な形で環境整備を進めてきました。また、With コロナ / After コロナのニューノーマル時代を迎えた今、“時間や場所にとらわれない多様な働き方”の実現に向けた取り組みも加速しています。

今回は、ダイバーシティに向けた、これまでの取り組みを具体的にご紹介するとともに、「雇用する・辞めずに働き続ける」から、「自律的なチャレンジ」、「イノベーション・新たな価値の創出」、および「ライフキャリアを自身で考える」といった、次のステージにおける課題認識を共有し、皆さんと一緒に企業におけるダイバーシティ&インクルージョンの深化について考えていきたいと思っています。



講演者

恒川 あをい

特任准教授

NTT 西日本株式会社人事部
ダイバーシティ推進室担当課
長、人間科学科研究科附属附
未来共創センター特任准教授

第 45 回 人間科学セミナー

ノルウェーの多文化主義と教育課題

2020 年 12 月 17 日 (木)

ノルウェーでは 1960 年代以降から移民の受け入れが始まり、特に 90 年代からはユーゴスラビアや中東・アフリカからの難民や、東欧からの労働移民が増加し、現在は総人口のうち移民が占める割合は約 18% (2019 年統計) に達している。これにともない、同化主義的だった教育政策は 2000 年代に入って多文化主義に軸足を移してきた。2004 年に発表された白書では、ノルウェー人の多様なあり方について言及され、2020 年に改定されたカリキュラムにおいても文化的多様性の尊重が強調されている。ノルウェーにおいて急激に進行した多文化化は、教育政策や教育現場にどのような変化をもたらしてきたのだろうか。本講演では、ノルウェーでも最も移民の多い市の一つであるドランメン市でのフィールドワークをもとに、学校現場の取り組みや大学の役割について取り上げながら、多文化社会における教育の課題と展望について紹介する。



講演者

北山 夕華 准教授

教育環境学講座

第 46 回 人間科学セミナー

サルと人間科学 自然からの贈り物

2021 年 2 月 27 日 (土)

中道正之先生は、40 年以上にわたり、野生ニホンザル集団の中で暮らすサルの顔を覚え、サルの行動発達や子育て、老いなどをテーマに研究されました。1996 年からは動物園で暮らすゴリラの観察やその他の飼育動物にも研究を進展させています。大阪大学人間科学研究科附属未来共創センターの初代センター長を務められ、シリーズ人間科学の発刊にも多大な貢献をされました。



【略歴】大阪大学大学院人間科学研究科博士課程修了、1986 年学術博士。大阪大学大学院人間科学研究科准教授を経て、2007 年から同教授。2014 年から 2016 年まで研究科長を歴任し、2016 年には同研究科附属未来共創センターの初代センター長を務めた。

代表作として『ニホンザルの母と子』(福村出版、1999)、『ゴリラの子育て日記』(昭和堂、2007) がある。大阪大学人間科学研究科の教員らの研究を紹介する「シリーズ人間科学」の初代編集委員長として、シリーズの発刊に貢献した。シリーズ人間科学は現在、第一巻の『食べる』(中道正之編、大阪大学出版会、2018) をはじめ、2020 年度までに 6 巻が刊行されている。



講演者

中道 正之 教授

行動生態学講座

◆ 1.2 まなびのカフェ

箕面市国際交流協会 × 未来共創センター

コロナ時代に考える多文化共生

日 時：2020年11月28日（土）14:00～16:00

参加方法：Zoom（オンラインミーティング）

講 師：小笠原 理恵 大阪大学大学院人間科学研究科助教

ゼア・ローズ 箕面市国際交流員

クラウディア・エリウス・オセゲダ・フィゲロア 箕面市国際交流員



箕面市国際交流協会と大阪大学人間科学研究科附属未来共創センターのコラボイベントとして、まなびのカフェ「コロナ時代に考える多文化共生」をオンラインで実施しました。8 か国からの多様な参加者にご参加いただき、コロナ禍での状況を共有しました。

企画から実施まで

まなびのカフェは、未来共創センターが大学外の団体や組織とともに運営する交流型の公開講座です。今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響により、例年通りに皆が集って学び合う場を共有するスタイルでの実施は叶いませんでした。しかし、多文化交流を続けてきた公益財団法人箕面市国際交流協会の担当者、坂口ピーターさんらとの打合せのなかで、コロナ禍で様々な問題を抱えている外国人市民の方の事例を伺うにつれ、このような時こそ多文化共生について考える必要があると考えました。そこで、オンラインでのイベントとして実施することを検討し、2020年7月から、合計3度の打合せを行いました。大阪大学大学院人間科学研究科の教員であり、多文化医療を専門としている小笠原理恵先生にご講演いただくとともに、箕面市の国際交流員：ゼア・ローズさん（ニュージーランド出身）、クラウディア・エリウス・オセゲダ・フィゲロアさん（メキシコ出身）に話題提供いただくことになりました。



打合せの段階から、各国でコロナ対応に様々な差があることや、人々の考えの違いも浮き彫りになり、議論は盛り上がりました。

打合せの段階から、各国でコロナ対応に様々な差があることや、人々の考えの違いも浮き彫りになり、議論は盛り上がりました。

イベント当日

小笠原先生からの講演とともに、ゼア・ローズさん、クラウディア・エリウス・オセゲダ・フィゲロアさんが、新型コロナウイルス感染症の流行における世界各国の対応等に関して話題提供を行いました。参加者はスタッフを含め30名を超え、留学生を含む8か国の出身者らが集って、コロナ禍における問題や状況について意見が交わされました。イベントでは、様々な質問をいただき、講師らが回答しました。そのいくつかを下記に紹介します。



Q. ニュージーランドとメキシコではコロナ追跡アプリはどのようになっていますか？また、プライバシー関連の問題は出ていませんか？

A. ◇ニュージーランドでよく使われているアプリは日記のような形のもので、感染が拡大している場所に行ったときなどには、そのアプリから通知があります。日記のようなものなので、第三者や政府は見れないようになっていると思います。（回答者：ゼア）
◇メキシコには追跡アプリはありませんが、何か質問があったときには、ネットでスナ・ディスタンスというコロナ対策のキャラクターに聞いて、回答をもらうことができます。（回答者：クラウドディア）

Q. 中国、スウェーデンでの感染者への非難、差別はどうなっているのでしょうか？

A. ◇スウェーデンについては、生の声を聞いたわけではなく、論文やニュース報道からの情報しかわかりませんが、感染者への非難、中傷や差別的な発言はみられないようです。中国では、非難、中傷や差別的発言や行動は出てきています。中国政府は、ある地域からの感染が報告されるとその地域を封鎖するといった強硬な対策を徹底しているので、国民の中にも敏感な反応があるように思います。

（回答者：小笠原）

◇政府が行う地域封鎖などの厳格な対応は、命を守るためなので納得できることです。ルールを守らない人に対して、批判があがるのは仕方ないことかなと思います。

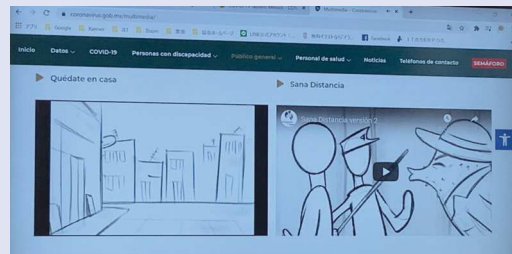
（中国人留学生からの追加コメント）

Q. ゼアさんとクラウドディアさんは、COVID-19 に関する情報をどのような媒体・方法で入手しますか？情報が多すぎて不安になった、という意見が講演中にありましたが、不確かな情報にはどのように対応していましたか？

A. ◇COVID-19 に関する情報は、ニュージーランドのニュースサイト、ニュージーランド政府のウェブサイト、日本のニュースサイト、WHOのウェブサイトで見えています。（回答者：ゼア）

◇メキシコ政府のホームページ [https://coronavirus.gob.mx/] で調べます。その他に、メキシコの家族や、イタリアの友人から話を聞いたりしています。日本語でも COVID-19 情報を調べて、病気などに使われる専門用語の勉強をしています。でも、日本の情報は専門的なものが多く、情報量も多いので、簡単に読むことができずに緊張してしまい不安になります。

（回答者：クラウドディア）



◎参加した大学院生の声

今回のイベントはオンラインでの実施でしたが、オンライン上でグループに分かれて参加者同士のディスカッションを行いました。大阪大学の外国人留学生らが、各グループの司会の役割を果たし、積極的に話題を共有しました。以下に、参加した大学院生の感想のうちの一部を紹介します。（※紙面の都合上、いただいた感想の一部を掲載しています。）

◎富安皓行（人間科学研究科博士後期課程、グローバル共生学講座）

グループでの対話の中で、地域の方々は外国人・外国にルーツを持つ人たちに何かしたいと思いながら、具体的に何をすればよいのか分からないと物語っていた。また外国人といっても一概にまとめることはできず、その人がどのくらい日本語を話せるのか、どのような職や立場で日本に来ているのか等、社会的状況により異なる支援が必要だということを再確認した。今は現状と向き合いながら、少しずつ地道に私たちにできることを考えていきたい。

◎サショ・ドリンシェク（人間科学研究科博士後期課程、基礎人間科学講座）

在留外国人で最初に思い浮かぶ問題として、新型コロナウイルスをめぐる情報の理解の困難さが挙がった。厚生労働省や法務省のホームページには多くの情報が掲載されているが、情報量の多さは、時に自分の欲する情報（例えば、一時帰国の可能性およびそれにかかわる手続き）の検索を、いっそう難しくする。そうした場合に、日本人による支援が大いに必要とされる。外国人だけでなくストレスを抱えるときの対処として、ある日本人参加者から素晴らしいアドバイスがあり、それは頻繁に散歩するということであった。まなびのカフェが開催された箕面市は、山や森など自然に恵まれた場所であるため、ストレスの解消や息抜きにふさわしい場所だと知ることができた。

◎ソウ・リジョ（人間科学研究科博士前期課程、グローバル共生学講座）

ディスカッションでは、普段知り合えない人たちと語り合うことができ、より多くの視点からコロナを見ることができた。最も印象に残っているのは、「情報を得ることの難しさ」と「文化の差異」である。ある留学生は母親から日本に帰国するように言われたが、自身が得た情報から日本の方が危険だと判断し、帰国しない決断をしたという話を聞いた。インターネットの発達によって様々な情報が手に入るようになったものの、何が正確で、自分に有益な情報であるかを判断することは難しい。コロナ禍においても、個人情報の守秘義務や個人の自由が最優先で尊重されている国もあるが、私には、命を守るための対策として隔離や封鎖などの政策の方が納得できる。これは国や地域によって歴史や文化が異なるためだと考えられる。そうした背景を考慮せず、表面的なことだけで、他国の対策を責めることは適切ではない。偏見を持たず、お互いの文化を理解、尊重することが大切である。その意味でも、異なる文化背景の人びとが交流できるまなびのカフェの取り組みは、本当に素晴らしいと思う。

◎匿名（人間科学研究科、留学生）

今回のまなびのカフェでは色々新しいことを教わった。ただ、グループディスカッションでは、インターネットが何回も途切れてしまって十分に話せなかったことを、ここにまとめたい。

日本到着後、成田空港でコロナの検査を受け、結果が陽性だったため、ホテルでの隔離療養を余儀なくされた。（感染の経験に関する内容、中略）・・・その後、隔離療養期間に関する情報が不確実で混乱し、東京から大阪に来るまでの間、次々に指示が変わったことには本当に困惑させられた。

今回のまなびのカフェのディスカッションで、私は自分が感染経験者であることを話さなかった。なぜなら差別されるのではないかと恐れていたからである。なぜこのことを隠したかというところあるアフリカからの留学生は、大学で教授から「みんな注意してください、特に M さん（アフリカからの留学生）、あなたは（COVID-19ではなく）軽い風邪とかでも、学校に来るのを控えてください」と言われたからである。こうした発言は、教授が暗に、「外国人」がコロナウイルスを拡散していると考えているようにも受け取れる。しかし本来は、私のように感染を経験した人が自分の経験を共有することは、コロナとの闘いに役に立つはずである。差別されるのではないかという恐怖心から、誰にもその経験を話せないような状況は、どこかおかしいと思った。



◆ 1.3 ランチトーク

ランチ
トーク
1

ジャーナル『未来共創』発刊記念 共生と共創

日時：2020年7月21日(火)
12:10～13:20

場所：オンライン 使用アプリ：Zoom

話題提供：

栗本 英世(人間科学研究科教授)
八木 景之(人間科学研究科博士後期課程)
織田 和明(人間科学研究科特任研究員)

参加者：約30人



コロナ禍のためにしばらく中断していたランチトークですが、Zoomを使用してオンラインで開催しました。

2020年度の一回目はジャーナル『未来共創』の発刊を記念してジャーナルの「特集1 共創・共創知とはなにか」を執筆した栗本先生・八木さん・織田の3人が話題提供者となって「共生と共創」をテーマにディスカッションをしました。これまでのようにランチを囲んで開催することはできませんでしたが、参加者の皆様のおかげで盛況となりました。既存の「共生と共創」とは一線を画した「人間科学型」の共生と共創を考えることが今の私たちの課題となっています。テクノロジーや大資本と我々の距離感、マジョリティがマイノリティに「共生」を強いることで結果として「同化」に至ってしまうこと、「仲間」と排除についてなどについて熱のこもった議論となりました。ジャーナル『未来共創』をきっかけにさらに思索を深めることができました。

ランチ
トーク
2

学習・研究のヒント

日時：2020年10月28日(水)
12:10～13:20

使用アプリ：Zoom

聞き手：

井上 瞳(人間科学研究科博士後期課程)
眞田 航(人間科学研究科博士前期課程)
倉田 和佳(人間科学部)
梶 健太(人間科学部)



10月28日の昼休みにコロナ禍の中での2回目のオンラインランチトーク「学習・研究のヒント」を開催しました。オンライン授業が続き、人と直接会う機会、話す機会が大きく減ってしまいました。大学での学習・研究は先輩・同期・後輩とともに進めることが、高校までと比べるとずっと増えますが、それも以前よりは難しくなっています。特に高校から大学へと環境が大きく変わった1年生を中心に、学習・研究に難しさを感じている学生が先輩に相談する場として今回のランチトークを開催しました。折悪しく1年生の参加はなかったのですが、人科で様々なことを学んできた先輩方が大学での学びと研究について研究分野の選択、普段の学習とレポート、理論と実践の往復、大学院進学のきっかけなどをテーマに話を繰り広げました。大学の専門の研究は、一人一人が自分のテーマをもって研究するからこそ、ともに学び、協力することが大切になっていきます。相互に比較検討することで、見落としが発見され、研究は進展します。一人で文献を読んで研究しているだけのように思われがちな哲学の研究も、孤独に進めるものではなく、仲間とともに進めています。コロナ禍の中で直接人と出会うことが難しくなっている現在ですが、様々な機会を捉えて仲間を増やして欲しいと思います。

記憶と風化そして復興『復興のための記憶論』をめぐる

日時：2021年3月27日(土)
14:00～16:00

場所：オンライン開催 (Zoom)

プレゼンター

宮前 良平 (人間科学研究科助教)

コメンテーター

岡部 美香 (人間科学研究科教授)

佐々木 美和 (人間科学研究科博士後期課程)

富安 皓行 (人間科学研究科博士後期課程)

参加者：25人

空白を知覚する

2020年度最後のランチトークは、特別編として『復興のための記憶論』を出版された宮前先生、被災地で調査・活動してきた教員・学生そしてフロアの皆様とともに記憶と風化そして復興を考える会となりました。

宮前先生はフィールドである野田村や写真返却お茶会の様子を多くの写真を用いながら生き生きと紹介することから始め、『復興のための記憶論』の議論の核心にある空白の知覚論へと話題を広げていきました。コメンテーターの佐々木さん、富安さん、岡部先生はそれぞれ宮前先生の著書を深く読み込んだうえで、いずれの方も視点から興味深い意見を述べました。コメンテーターの発表や全体討議を通じて、宮前先生の喪失をめぐる語られない他者の記憶の存在を強く肯定する議論の豊かな広がりが発見されていきました。



宮前 良平 助教



コメンテーターの岡部先生、佐々木さん、富安さん

2 OOS

OOS（大阪大学オムニサイト）は、2017年4月からスタートしました。大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センターのプロジェクトのひとつで、支え合う社会、共生社会を創造していくための新たな共創の仕組みです。産官社学連携により、学内外のセミナーやイベントの「場」、企業・財団・社团・地方自治体・NPO/NGOなどの活動の「場」を支援、活用しています。

◆2.1 OOS 協定

2020年度は新たに1件の協定が結ばれ、様々な活動が実施されました。

一般社団法人
地域情報共創センター
担当教員：稲場圭信



◆2.2 OSS 関連イベント

活動紹介 1

「防災ピクニック」を実施しました

2020年11月8日（日）、大阪大学吹田キャンパスにて災害ボランティアラボ主催、未来共創センター・NPO法人日本災害救援ボランティアネットワーク（NVNAD）共催、すいすい吹田協力のもと「防災ピクニック」が開催されました。

「防災ピクニック」は楽しみながら防災について学ぶ、をコンセプトとしたイベントです。今回の「防災ピクニック」は、日本災害救援ボランティアネットワーク事務局の寺本弘伸さん、大阪大学人間科学部2年の佐々田真尋さんを中心とし、団体と学生の協働のもと実施されました。

当日はピクニックに最適な秋晴れのもと、スタッフ含め約15名が参加しました。子ども連れのお父さんや中学生・高校生の姿も見られました。参加者はグループごとに12のチェックポイントを回ります。チェックポイントには防災に関するクイズが用意されています。相談しながら答えを決めていました。

歩いている中では他愛のない話が起きます。



身体的距離を取りながら、
自己紹介をし合う参加者たち

ある参加者は最近流行っているアニメや、ゲームの話を語り、お勧めの勉強方法を大学生の参加者に尋ねました。他の参加者は、コロナ禍における仕事の現状について他の参加者に聞かせてくれました。こうやって話をしていると、あっという間に1時間半の時間が過ぎてしまいます。

クイズから帰った後は全員で防災食を食べました。お湯を注いで食べられるアルファ化米と常温で食べられるカレーです。食べ終わるとクイズの答え合わせに入りました。司会を務める佐々田さんは答えを発表し、答えとなる理由を分かりやすく説明していきます。さいごに参加者全員が感想を述べイベントは終了しましたが、終了後も参加者同士で話に花が咲いていた様子でした。

今回は参加者15名という比較的小さなイベントとなりました。寺本さんは今回のイベント企画の際、コロナ禍におけるよりよいイベント開催の方法を模索した、と言います。

本イベントの目的は災害時に私たちの取るべき行動・行為を学ぶことです。しかしながら本イベントは、地域住民の方に阪大に足を踏み入れ学生たちと交流する機会を提供します。コロナ禍においてどのようなイベントをどのように開催するか、について私たちはまだまだ模索中ですが、この活動に大学と団体・地域による協働の萌芽を見たように思いました。



阪大内に存在する停電時の電源供給施設。大阪大学学生であっても知らないことは多い

活動紹介2

愛媛県西予市野村町との日本酒「緒方洪庵」復興プロジェクト

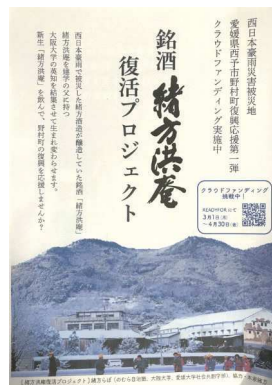
佐藤 功（人間科学研究科 教授）



本家緒方酒蔵内での講義の様子

OOS 協定先である愛媛県西予市野村町において、2018年の西日本豪雨で被害を受けた地域の住民のみなさんや愛媛大学とともに、酒蔵を使った復興講座・イベントや「緒方洪庵」の名をもつお酒の醸造プロジェクトなど、多岐にわたる事業を展開してきました。もともとは復興支援がきっかけでしたが、活動のなかで、地域づくりや地域課題解決を目的とする有志団体「緒方らば」へと発展し、酒造とコラボしたNEO「緒方洪庵」醸造プロジェクトが生まれました。できあがった日本酒「緒方洪庵」は、クラウドファンディングによる支援にも成功し、その支援金の一部は被災地の復興にも貢献することとなりました。

学問的知見からフィールドを探して始まったプロジェクトではなかったものが、今は野村をフィールドに何ができるのだろう？と、多くの可能性が生まれています。「楽しい」が学問になってきた。どこへいくのか、どこまでいくのかわからないことが、「共創」の醍醐味だと感じています。



緒方洪庵復活プロジェクトのポスター
（「クラウドファンディング復興支援！銘酒「緒方洪庵」を復活させ、野村のまちづくりを応援したい」）

OOS 協定先への見学：共和メディカル

富安 皓行（人間科学研究科 博士後期課程）

2021年2月22日、共和メディカルグループによる「みんなの保健室」を見学しました。

「みんなの保健室」は年齢・性別問わず誰でもふらっと立ち寄れ、健康のことを相談できる居場所をコンセプトとし、2021年2月10日にオープンしました。

「みんなの保健室」の特徴は、医学的・専門的知識を持っているスタッフが在籍し医学的な相談に乗ってくれる点にあります。当日いらっしゃったスタッフの方の一人は看護師資格、もう一人の方は理学療法士の資格を持っていたらっしゃるということです。

お話を伺っている途中、小さな男の子がスタッフのお二人に向かい窓の外から手を振りました。お二人はその男の子に笑顔で手を振って返しました。私がその男の子について何うと、お二人はその男の子のことをとりわけ知っているわけではないとのこと。「みんなの保健室」は2021年2月に始まったばかりで、現在の課題として活動を認知してもらうことが必要だといいます。男の子への手の振り返し。些細なことのように、その小さなことの繰り返しによって少しずつ活動を知ってもらおうと努力するスタッフの方々の姿が印象的でした。



スタッフの方々のお写真



入口の手作り看板。「みんなの保健室」を知ってもらうために。

「みんなの保健室」は誰かと誰かの繋がりを創出するための場だといいます。

スタッフは訪問看護・訪問リハビリ事業所「あかりナースケアステーション」のスタッフでもあります。今まで培ってきた臨床経験が、繋がりへの大切さへの気づきとなり、「みんなの保健室」の活動に繋がっているようです。

「みんなの保健室」には OriHime というロボットを用いた遠隔スタッフの方がいらっしゃいます。OriHime の操縦パイロットの方は医師免許を持っていて、障害のために遠隔から参加されているのだそうです。その方は「みんなの保健室」の役割について「軽く相談に来て、そこから受診をしてもらえるように動機づけをして、道を作ってあげる感じです」とおっしゃいました。インタビュー中に今後の希望や展望について楽しそうに話すスタッフの方の姿が印象的でした。

その人がその人らしく健康に生きていくための身近な医療・居場所・繋がりを創出していくこと。「みんなの保健室」の挑戦は始まったばかりです。しかしながら素敵なスタッフさんの笑顔は、これから人を惹きつけていくのではないかと感じました。

自身の健康相談に乗ってもらう
インタビュアー

OOS 協定先への見学：タウンスペース WAKWAK

太田 朱里（人間科学研究科 博士前期課程）

2021 年 2 月 4 日（木）、高槻市富田地域にある第四中学校で行われた「いまとみらい科」の授業を見学させていただきました。この日はゲストとして、一般社団法人タウンスペース WAKWAK の岡本工介さんが招かれていました。タウンスペース WAKWAK では、大阪北部地震後多セクターとの共創の中で「未来にわたり住み続けたい町」コミュニティ再生プロジェクトを行っています。このプロジェクトには、OOS 協定を結んでいる大阪大学大学院人間科学研究科も関わり、学校の授業に地域と大学が参画し授業づくりを行っています。今回の授業はその一環として「子どもの居場所づくり」がテーマでした。今回は 2 回目の授業ということで、前半は 1 回目の授業から生徒たちが感じた疑問点を岡本さんに質問し、後半は岡本さんから計画の概要をお聞きました。

まず前半の質問タイムでは代表の生徒たちの司会・進行のもと、授業が進められていきました。司会の生徒が他の生徒を指名して岡本さんに質問を投げかけるという形式でしたが、どの生徒も当てられたらしっかり質問できていたことに感心しました。生徒たちが持っている用紙を後ろから覗き見してみると、事前に考えた質問を記入する欄がありそれぞれが 1、2 問ほどの質問を用意してきていました。当てられた生徒はその用意した質問を岡本さんに投げかけていくのですが、同じような質問は 1 つもなく、生徒一人一人がしっかり自分の意見を持って授業に臨んでいる様子が伺えました。さらに、質問の内容がまとまらない生徒も数名いましたが、その生徒たちも当てられたその場で質問を考え発言している様子を見て、どの生徒も自分で考える力を持っているのだなと感じました。

授業の後半では、岡本さんからパワーポイントを使って今後のまちづくりについての概要などが生徒たちに説明されました。そして、最後に岡本さんからこのプロジェクトにとっても重要な「お願い」が生徒たちに出されました。それは、民家を改装してこれから開設するコミュニティスペースの名前を付けるという大役です。現在、タウンスペース WAKWAK は活動の 1 つとしてこども食堂の運営を行っており、その 1 つが「わくわく食堂」という名前なのだそうです。これも彼らの先輩にあたる生徒たちが名付けたものだということでした。一人一人、しっかりと自分の意見を持って考えることができる生徒たちなら、新しく創られるコミュニティスペースにぴったりの素敵な名前を考えてくれるだろうと期待が膨らみました。

地域・家庭・学校・行政・大学・企業など、たくさんの人たちの協働によってどんな町が創られていくのかと、とてもワクワクしました。



◆ 2.3 OOS シンポジウム

第3回 未来共創センター OOS シンポジウム

日時：2021年3月5日(金)
 場所：オンライン (Zoom) での開催
 主催：大阪大学大学院人間科学研究科 附属未来共創センター

◆ プログラム

第一部／公開シンポジウム

【開会挨拶】 臼井 伸之介 (大阪大学人間科学研究科長)

【キーノートトーク】 山中 浩司 (未来共創センター センター長) 「OOS と共創知」

【取り組み事例の紹介】 当日参加 15 団体からの活動報告

一般社団法人全国自治会活動支援ネット／一般社団法人タウンスペース WAKWAK／一般社団法人地域情報共創センター／岩手県九戸郡野田村／NPO 法人おおさかこども多文化センター／NPO 法人北いわて未来ラボ／愛媛大学社会共創学部／大阪市教育委員会事務局／共和メディカル株式会社／ジャトー株式会社／新安世紀教育安全科技研究院／中銀インテグレーション株式会社／認定 NPO 法人日本災害救援ボランティアネットワーク (NVNAD)／野村地域自治振興協議会／パナソニックホームズ株式会社街づくり事業開発部 (50 音順)

第二部／OOS パートナースディスカッション

「あたら市」の社会課題の解決にむけたアイデアを提示する
 (学生ファシリテーター：織田和明、大川ヘナン、富安皓行、ソウ・リジョ、中井隆斗、山口真美、羅 方舟、櫻木晴日)

【閉会挨拶】：渥美 公秀 (未来共創センター 副センター長)



臼井研究科長からのご挨拶

◆ 参加者

企業・NPO・自治体・大学教員や学生約 60 名

◆ 内容

第一部の各団体様からのご発表では、1 団体 3 分ほどで、今年の活動内容をご報告いただきました。教育から高齢者支援、防災活動からコミュニティづくり活動まで、多様な活動を展開されている方々が国を跨いでご参加くださいました。日本語と中国語の通訳を担う学生さんもあり、まさに多文化・他セクターの方々と交流できた時間となりました。



オンライン開催の様子
 (※プライバシー保護のため、
 写真にモザイクをしています。)

第二部のディスカッションでは、参加者が 8 チームに分かれ、架空の市「あたら市」における社会課題の解決に向けたアイデアを出し合いました。1 つのチームには企業役員・行政職員・NPO スタッフ・大阪大学教員など様々な立場の方が集まり、学生が取りまとめ役を務めました。



第 2 部 OOS パートナース
 ディスカッション
 (※プライバシー保護のため、
 写真にモザイクをしています。)

<ディスカッションに参加した学生の声>

学生の声 1

私たちのグループには、NGO、企業、大学に所属する日本、そして中国四川省の方が集まって話し合うまさに共創の場となりました。私たちは防災につながるネットワークの構築を課題にしました。メンバーそれぞれが経験を踏まえて意見を出し合っていくと、大学生を中心に小中高生に向けて防災イベントを企画すれば保護者や高齢社会も巻き込んだイベントになっていくから、ネットワークの構築が進むのではないかという答えが見えてきました。ディスカッションを通じて皆さんの経験を交換することができたと思います。とても有意義な会でした。

学生の声 2

Zoomでのディスカッションとのことで緊張しましたが、さまざまな方々が積極的に発言してくださったので無事に話を進めることができました。今回のディスカッションを通して各団体がどのような活動をしているのかについて話を伺うことができてよかったと思います。また全体の発表を聞いて、高齢者や外国人の問題が多くの方にとって課題として認識されていることに気づくこともできました。

学生の声 3

後半部は、4つの課題に対する解決策のアイデアをお話しくださる方もいれば、専門とは異なるのでまずは話を聞くだけにする、など、いろんなスタンスで始まりました。最初は震災を専門的に取り組まれている方のお話を聞き、その後は普段は震災と関係のない分野で活躍されている方が、「自分のこの技術が活用できるのでは」、もしくは「このような視点が必要なのではないか」、とお互いの得意分野を的確に引き出しながら、アイデアをさらに発展させていくことができました。普段は自分の専門分野にとどまってしまうですが、異なる分野で活躍されている方との交流がこのような新しい刺激にあふれているのかと衝撃を受けたので、またこのような機会が得られたらいいなと思いました。

来年度のシンポジウムは対面で開催できれば、と渥美副センター長のお話で終了いたしました。ご参加いただいた皆様、ありがとうございました。来年、対面でお会いできることを楽しみにしております。

(文責：富安・櫻木)

◆ 2.4 Student's Voice

一步踏み出せばこんなにいろんな人と繋がれるんだって思ったのは、
自分の中ですごく衝撃でした。

人間科学部2年 佐々田 真尋さん

佐々田真尋さんは未来共創センターとOOS協定関係にあるNPO法人日本災害救援ボランティアネットワークにてインターンシップに参加しました。佐々田さんは11月8日に行われたイベント「防災ピクニック」の運営に大きく携わりました。今回は佐々田さんに防災に興味を持つことになったきっかけ、OOS協定団体との協働によるイベント企画・実施で学んだこと、今後の展望などについて伺いました。

Q. 防災ピクニックに関わったきっかけと佐々田さんの仕事について教えてください

現在、日本災害救援ボランティアネットワークでインターンをしており、団体からお話を頂いたことで「防災ピクニック」に関わるようになりました。

インターンを始めたきっかけは新型コロナウイルスの影響も大きいです。学校が新型コロナウイルスの影響でなくなり、アルバイトの日もあ



防災ピクニックで参加者と向き合う
佐々田さん

るけれど何もない週もある、というような状態がずっと続いていました。

その時、自分の恵まれている部分に気づいたんです。経済的にも困らなかったですし、実家暮らしなので孤独になることもそれほどありませんでした。そう思ったとき、自分は助かっているのに何もできないのは無力すぎる、何か自分もしなきゃという心境になりました。逆にどこかに繋がりを見つけていかないと自分がもたなくなるような気もしていました。

防災ピクニックでは地図を作ったり、問題文をパワーポイントで作ったりしました。ピクニック中に出される問題も、団体からのアドバイスを基に先輩に相談しながら作りました。回答用の Web フォームやアンケートも含め、何かを作るという仕事に関しては、基本的にほとんど関わらせていただいていたと思います。

Q. 協働することの難しさはありましたか？

何かにぶつかったという具体的なことはなかったです。ただ一週間ごとに会議があるので、来週までに何、再来週までに何をすると決めて仕事していたのですが、間に合わないのではと思うときもありました。

司会もやらせていただきますと言ったものの、当日ぶっつけという感じではじめは緊張しました。団体の方がぐいぐい引っ張ってくださったので、その勢いに乗らせていただきました。

Q. 終わってみて正直な感想は？

色んな方に盛り上がっていただけて安心しました。初対面同士の方も多く、クイズには難しい内容もあったので、本当に盛り上がっていただけたかと思っていましたものですから。またみなさんが新型コロナウイルスの影響下で、どこまで安心して参加していただけるのかということも心配していました。

終了後のアンケートは「こういう問題は難易度をもうちょっと上げた方がよいのでは」とか「グループの人数が多い方がもっと盛り上がるのではないかな」というような細かいご意見を頂きました。ただ全体としては面白かったというポジティブな意見を多くいただきました。これらの意見は有難く受け取り、今後の活動に活かしていきたいと思っています。



オンラインインタビューで、聞き手の質問に丁寧に応じる佐々田さん

Q. 今後の展望について聞かせてください。

今回防災ピクニックで企画をやらせていただいて、技術面でいろいろ考えさせられることもありましたが、初めて人前で立たせていただく機会を得ました。そのなかでも一番の収穫は「繋がり」を得られたということです。イベントの班分けもいろんな「繋がり」を持っていただけるよう考え、あえて大学生を別グループに分けたりしました。今までは「繋がり」なんて考えたこともなくて。ただ今回インターンさせていただくことになり、他のボランティア団体ともかかわらせていただいたのですが、そこで今まで存在すら知らなかった地域の方とお話しする機会がありました。一歩踏み出せばこんなにいろんな人と繋がれるんだって思ったのは、自分の中ですごく衝撃でした。

新型コロナウイルスがこれからどうなるかわかりませんが、時間があれば活動にもっと関わっていききたいと思っています。

日本災害救援ボランティアネットワークの活動の中には、これまで関わりたいと思っていながらも関わっていない活動があります。団体の皆さんは人を巻き込んでくださいます。それが有難いです。もちろん防災だけでなく他の課題にも興味があります。そちらの方も今後やっていきたいと思っています。

(聞き手・文章：富安 皓行)

3 オープン・プロジェクト

◆3.1 オープンプロジェクトの活動

◎ Ethnography Lab 担当教員：森田敦郎

ウェブサイト：<http://ethnography.hus.osaka-u.ac.jp/>

社会学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：公開イベント 8 件（参加人数約 500 人）

国際シンポジウムの件数と参加人数：1 件（長期にわたる自立分散型国際ワークショップ）
（参加人数約 100 人程度）

初級、中級、上級からなる質的研究方法教育カリキュラム（フィールド調査法特講、人間科学方法演習、応用人類学特講）の運営を継続して行っている。現在、社会学・人間学系、共生学系、教育学系から約 10 名の教員がカリキュラムに協力しており、研究科全体としての基礎教育の基盤を担っている。また、学部では社会学科目における実験実習改革、学部と大学院の接続改善のための事業を実施している。このほかに、研究分野と学系を超えた方法論教育の充実に向けた取り組みを実施している。

産学連携においては、一般社団法人パースペクティブと京北地域における循環経済と持続可能なモノづくりのためのプロジェクト「工藝の森」に継続して協力している。このプロジェクトを通じた学生教育も行っており、4 月末日現在で学部生・大学院生合わせて 10 名が他学部を含む本学から、5 名程度が連携関係にある京都工芸繊維大学から参加している。なお、本プロジェクトは、複数の企業との協力の中で進められている。本プロジェクトでは、パースペクティブとの共同調査をベースに新たな国際授業（シカゴ大学と共同開催）と社会人向けの教育コンテンツの開発を行っている。

この他に一般向けのオンライン講座としてデジタル・エスノグラフィ入門セミナー（9 月）と、デザイン人類学に関する座談会（12 月）を実施した。前者については 120 名、後者については 180 名の参加者を得た。両公開講座ともにデザイン、リサーチ関係の実務者が多く参加した。なお、デザイン人類学に関する座談会は、(株) MIMIGURI が運営する WEB メディア Cultibase に記事化されて掲載された。

(株) ロフトワークとは、「Homemade City」と題したモノづくり、環境、都市の関係を考えるオンライン講座を共同で実施した。合計 6 回のオンライン講座を開講し、申し込み総数 193 名（総再生回数 893・4 月 2 日現在）であった。参加者の多くは人類学とエスノグラフィをビジネスに生かそうとする社会人で、その属性は、Ethnography Lab 及び本研究科へのビジネス界からの関心を考える上で興味深い資料となっている。

文理融合研究においては、上記の京北でのプロジェクトで京都工芸繊維大学デザイン・建築学系と教育・研究両面で協力しているほか、東京大学工学系研究科（社会基盤学専攻）との共同研究を継続している。

国際連携に関してはオンラインでの分散型ワークショッププロジェクトを開催した。Speculative Design と人類学、エスノグラフィを組み合わせたこのプロジェクトは世界的な注目を集め、Goldsmiths, Yale, Rice, Chicago, Copenhagen, University College Cork, Free University Bozen-Bolzano らからおよそ 100 名近い教員・学生の参加を得た。



◎災害ボランティアラボ 担当教員：渥美公秀

社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：31 件（参加人数 442 人）

一部取り組みの活動主体となった阪大学生グループ「すいすい吹田」は NHK、毎日新聞をはじめとするテレビ・新聞・雑誌等で繰り返し紹介されている。

（１）新型コロナウイルス学習会

講師をお招きして、新型コロナウイルス感染症に関して、被災地に支援に入る準備として学習会を 7 月に 3 回開催した。

（２）国際的なネットワークの発足

新型コロナウイルス学習会の成果として、中国やフィリピンなどの関係者と連合体（IACCR）を発足した。定期的にオンライン会議を開催し IACCR—KOBE の設立に至った。

（オンライン会議を 14 回開催）

（３）防災ピクニック（計 2 回開催）

コロナ禍での自然災害を視野に入れながら、防災意識の啓発や他団体との連携を目的に 11 月と 2 月の計 2 回開催した。このイベントの企画・運営には、人間科学部の学生も関わった。（共催：未来共創センター、子どもの安全ラボ）



（４）独居高齢者への「よりそい隊」の活動

新型コロナウイルス学習会の成果として、地域での独居高齢者への寄り添い活動を、昨年度に継続して実施した。（共催：すいすい吹田／協力：吹田市社会福祉協議会（五月が丘福祉委員会）

■協力事業「おさんぽあるこう会」（3 月）

阪大グローバルビレッジ内の店舗など 12 か所にチェックポイントを設置し、参加者は 3 班に分かれて探して、防災クイズに挑戦してもらった。（主催：共和メディカル株式会社（みんなの保健室）OOS 協定団体／場所：阪大グローバルビレッジ内）

◎心理・行動フォーサイトラボ 担当教員：三浦麻子

ウェブサイト：<http://pbl-f.hus.osaka-u.ac.jp/>

社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：2 件（参加人数 40 人）

2020 年度は、2 つのイベントを実施した。まず 7 月 18 日に「心理・行動フォーサイトラボが目指すもの」として Zoom によるオンライントークセッション（学外協力者 3 名を含めてメンバー全員が登壇）を開催した。学内外からの参加者を広く募集し、40 名以上の参加者を得た。10 月 31 日には問題解決技法ワークショップを行い、「阪大人科」をテーマに、目標に向かって参加者全員で作業して、一定時間内に成果を生み出す場を体験学習した。これらの成果はラボのウェブサイトで詳細に報告している。



2020 年 10 月 31 日の問題解決技法のワークショップより

また、平井准教授が担当する大学院授業（心の健康教育の理論と実践［公認心理師科目］）において学外協力者の小松利英氏をゲスト講師として招へいし、心理・行動学的な観点を導入したデジタルマーケティングに関する講義をしていただいた。

その他活動の詳細は随時上記のウェブサイトで紹介している。

◎地方における人材共創 担当教員：吉川 徹

10月に島根大学山陰研究センター、松江市、島根県教育委員会などと共催で市民シンポジウムを開催する予定であった。シンポジウムの内容は、高校生、高校教員、大学、地方自治体、高校生の保護者、地元企業、地元自治体などの若年層の進学、就労と地域移動に関わる当事者のそれぞれの立場からの、現状理解と実態報告、それに基づくディスカッションの場を設けるということであった。しかし、新型コロナウイルス感染拡大への対応から、開催時期が延期になり、最終的には年度内開催は見送られることとなった。2020年度の後半にはあらためて資料を収集し、打ち合わせを行って2021年11月に公開市民シンポジウムを開催する方向で計画の仕切り直しが行われている。

◎子どもの安全ラボ 担当教員：中井 宏

社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：約10件（参加人数のべ300人）

子どもの安全のための絵本作りを目指したプロジェクトが、大阪大学未来基金「クラウドファンディング基金」寄付金募集実施プロジェクトの一つに採択され、2020年5月～6月にかけて約400万円の寄付金を集めた。現在、イラストレーターが決まり、電子書籍としての出版を目指しているところである。絵本内に含むコンテンツについては、各種統計や発達心理学・教育心理学などの文献を収集しているほか、子どもの事故実態と保護者・保育者の認識の齟齬に関する調査などを進めているところである。

これ以外の取り組みとしては、2020年度はコロナの影響で学校での安全教育に出向くことはなかったが、以下のような活動を行った。

- ・親子で防災と交通安全を学ぶオンラインイベントを災害ボランティアラボと共催
- ・PTAでの講演や通学路点検活動（豊中市立桜井谷小学校、茨木市立春日小学校）
- ・ファミリーサポートセンター会員への講習×7回
- ・日本ライフセービング協会天橋立ライフセービングクラブ研修会
- ・大阪府教育庁 学校安全総合支援事業成果発表会での講演



◎障害ラボ 担当教員：石塚裕子

社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：3件（参加人数のべ200人）

研究会を2回、勉強会を1回、障害のある人が参画するシンポジウムを3回開催（共催）した。また、阪大エコレンジャーの業務に参与し、今後のプロジェクトの準備ならびに共生学系2回生の実験実習との連携も試行した。

●研究会

ケアの文化研究所の本人リサーチャー中西氏より知的障害のある当事者の生活ならびに協働の在り方について意見交換を行った。

●勉強会

阪大エコレンジャーの参考とした東京大学における障害者雇用に関する勉強会を行った。（東京大学ダイバーシティ推進課・バリアフリー支援室）

●シンポジウム

改正バリアフリー法に関する講習会（10/9）（知的障害、精神障害のある人の参画）、災害と福祉のまちづくりに関するセミナー（3/7,3/21）を日本福祉のまちづくり学会と共催で開催した。

●阪大エコレンジャーとの連携

述べ16日間エコレンジャーの業務に参与し、スタッフとの信頼関係を構築した。2020年12月25日に人科敷地内の花壇において、人科生とエコレンジャー5名との協働作業を行った。



◎グローバルビレッジ・コミュニティ・プロジェクト（GCP） 担当教員：稲場圭信

社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：4 件（参加人数：105 人）

月に一回の定例会議を基盤として、大阪大学グローバルビレッジ津雲台（以下 GV）関連企業の方々とさまざまな協働を行ってきた。

① GV コンセプトブック作成

昨年度の 9 月には学寮教職員宿舎部分の入居が開始し、1 月以降は、民間付帯施設の入居及びテナントの開業もつづいた。しかしながら、どのようなまちにしていくなか住民やテナント企業の方々との連携は不十分であった。そこで、まずは GV を利用してもらいイメージを持ってもらおうということで、コンセプトブックを作成した。作成にはすでにグランヒルユニバ中銀での連携があった大阪市立デザイン教育研究所の学生たちにデザインを依頼した。完成品はすでに入居者及びテナントに配布済みである。



②大阪市立デザイン教育研究所シンポジウムへの登壇

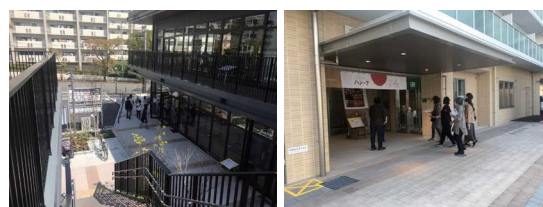
上記の関わりをもとに、大阪市立デザイン教育研究所のシンポジウムにおいて、GV でのイベントを学生と考えるワークショップを開催した。

③防災まちあるき

共和メディカルが運営するみんなの保健室のイベントとして、災害ボランティアラボと連携して防災まちあるきを 3 月 26 日に開催した。グランヒルユニバ中銀や教職員宿舎の入居者含め 20 名弱の参加があった。

④共創ワークショップ（共生学科目実験実習報告会）

共生学科目 2 年生履修の授業である実験実習のフィールドの一つとして GV が設定され、10 名の学生が約 3 ヶ月間のフィールドワークを行った。また、その報告会を 1 月 8 日に GV 内で開催し、関連企業および学寮生含め 30 名弱の参加者があった。



◎マイノリティ教育ラボ 担当教員：榎井 緑

社学連携・社会貢献イベントの件数と参加人数：6 件（参加人数：190 人）

今年度は主に 3 つのプロジェクトが推進された。

- ①「つばめ」という大阪大学の大学生が中心となった学習支援グループが、コロナ災禍での中学生・高校生の支援をオフライン・オンラインで行い、地域のユースプラザの支援とも連携するようになった。
- ②「翻訳プロジェクト」は主に外国にルーツを持つ子どもたちの支援のため、大阪府教育庁や大阪府立高校への翻訳協力や、ホームページでの多言語情報などを、大阪大学の大学生、留学生、他大学の学生、卒業生修了生、元研究生、教員らで 13 言語の対応を行った。
- ③「夜間中学プロジェクト」では大阪府内の 3 校の夜間中学と連携しながら、その現状や課題を知ると同時に、うち 1 校において、NPO と連携しながら母語を使用した遠隔支援実験を行った。

また、初年度ということもあり、初期の段階で学生たちが中心となりホームページを作成、発信すると同時に、マイノリティ教育ラボに広く関わる人たちのプラットフォームづくりのために 4 月から 9 月にかけてオンラインでの研修会を行った。



◎老いと死の研究ラボ 担当教員：榎藤恭之

【研究会】

今年度は下記日程で計7回にわたるオンライン研究会を実施し、これまでの研究成果に関する意見交換を行った。

2020/ 9/29 (水)	18:30～20:30	約40名参加
2020/10/21 (水)	18:30～20:30	約40名参加
2020/11/18 (水)	18:30～20:30	約40名参加
2020/12/16 (水)	18:30～20:30	約40名参加
2021/ 1/20 (水)	18:30～20:30	約40名参加
2021/ 2/17 (水)	18:30～20:30	約40名参加
2021/ 3/17 (水)	18:30～20:30	約40名参加

【報告書】

10年間にわたる長期縦断研究の成果をまとめ、『SONIC 研究10周年記念業績集』（全93ページ）を作成した。



◎緒方らぼ 担当教員：川端 亮

大阪大学内で適塾記念センター、産業科学研究所、工学研究科との連携を深め、旧緒方酒造の「緒方洪庵」の商標を引き継ぎ、復興の象徴であるNEO「緒方洪庵」という日本酒を醸造し、3月に日本酒を完成させた。また、3月からクラウドファンディングで寄付金を集め、野村のまちづくりに役立てる試みを行なっている。現在、234人の支援者から3,123,000円をご支援いただいている。また本家緒方の蔵は、その復興の取り組みが認められ、愛媛県が主催する「えひめ南予きずな博」のイベント会場の一つに選ばれており、「がいなんよ大学 in のむら」として活動していく予定となっている。愛媛県、きずな博のプロデューサーと野村地域自治振興協議会、愛媛大学社会共創学部と協議を続け、計画を練り上げている。



緒方らぼクラウドファンディング



日本酒「緒方洪庵」

4 研究事業

◆4.1 研究会の運営

2019年度から、下記の2つの研究会をセンター主催で立ち上げました。研究会の活動を通じて、人科内での分野を超えた学際研究を推進し、共創センター出版のジャーナル『未来共創』の出版につなげることを目的としました。

【A. 共創知研究会（セミナー形式）】

「共創」「共創知」に関わる活動や研究をされている外部の講師に話題提供いただきました。第三回は、京都大学経営管理大学院の山内裕先生を講師にむかえ、ZOOMを用いてオンラインで開催しました。

第三回共創知研究会

「闘争」としてのサービス：価値共創の理論とデザイン方法論

山内 裕 先生（京都大学経営管理大学院准教授）

日 時：2021年1月27日（水）15:00～17:00

場 所：オンライン開催 (Zoom)

参加者：36人



講師の山内先生はエスノメソドロジーを用いて鮎屋やファストフード、イタリアン、アパレルなどの現場でのサービス提供者と客の間のインタラクションを分析し、サービスのあり方を研究しています。山内先生の著書『「闘争」としてのサービス—顧客インタラクションの研究』は渥美公秀先生をはじめとして多くの研究者から高く評価されています。

山内先生は、サービスとは「闘争」であり、そこから「価値共創」が生まれるのだと言います。実際のサービスの現場のエスノメソドロジー的観点からの細やかな分析を踏まえた明快な議論によって私たちの持つ通俗的なサービス理解が覆されていきました。

サービスを提供するとは客のニーズを満たすことだと一般的に考えられています。しかし高級な鮎屋におけるサービスの調査から、山内先生は価値共創を基本とするサービスにおいては職人が客をテストし、否定していることを明らかにします。そしてヘーゲルの主人と奴隷の弁証法を参照しながら、職人と客の間には承認をめぐる弁証法的闘争が起こっていると論じます。客は承認を巡る緊張感のある闘争関係を経ることに依って初めて、自己を獲得できるのです。客が持っている素朴な主体理解を否定し、新たな主体への生成変化をもたらすものとしてのサービスのあり方を山内先生は価値共創を基本としたサービスとして発見しました。

今回の研究会では共生学系の宮前良平先生と社会学・人間学系の池田建人さんにコメントと質問を準備してきて頂きました。宮前先生はサービスと隣接概念の間の区別を、池田さんはサービスの持つ可能性や、闘争としてのサービスによって大衆化が起きるとはどういうことなのかを質問しました。いずれも議論の重要なポイントについての補足を引き出す興味深い質問でした。

学生の中野さん、中川さんの質問は「闘争」に耐えられない人やマイノリティへの配慮を欠いたものではないかというものでした。この点は重要なポイントとなるでしょう。渥美先生が山内先生の研究を踏まえて「リスペクトのための闘いと言いつける必要がある」とコメントしました。これは私たちの重要なミッションの一つだと思います。闘争の場に誰もが臨めるようになること、闘争に耐えられる主体変容の可能性を保つこと。これが共創の条件なのでしょう。

（文責：織田 和明）

【B. テーマ研究会（勉強会形式）】

テーマを決めて、そのテーマに関心のある教員や学生を募集し、固定メンバーで2か月に1度ほどの研究会を実施しました。2020年度のテーマは、「レジリエンス」として、コロナ禍という背景も重なり、計5回の研究会を実施して深く議論が交わされました。生物進化、保健医療、防災・復興、心理学、高齢者の健康、教育学等の観点から、多分野での意見交換がなされました。その後、研究会のメンバー4名が、ジャーナル『未来共創』の特集「コロナ禍に考えるレジリエンス」に寄稿しました。



「レジリエンス」研究会の様子

◆4.2 ジャーナル『未来共創』の発刊

未来共創センターでは、第6号まで刊行されてきたジャーナル『未来共生』を引き継ぎ、名称を新たに、ジャーナル『未来共創』として2019年から発刊を開始しました。2020年度の第8号では査読論文2本、特集論文4本、研究ノート3編、書評3編、そして5本のエッセイが収録されています。また、本号より新たに、「フォーラム」の区分を設け、2本の論考が掲載されました。

◎目次

発刊にあたって 渥美公秀 001

《論 文》

米国に住む「日本人ゲイ」により語られる物語／語りに関する研究一どのように自身の性的マイノリティ性と人種・民族的マイノリティ性について物語るのか 富安皓行 003
性暴力被害とトラウマを再考する—新自由主義とポストフェミニズムの観点から 井上 瞳 031

《特集 レジリエンス》

特集にあたって—コロナ時代に考える「レジリエンス」 木村友美、織田和明 064
人間のレジリエンスとナラティブ 日高直保 069
人類進化におけるレジリエンス 中野良彦 085
レジリエンスについて災害研究を通して考える 渥美公秀 109
医療とレジリエンス 小笠原理恵、モハーチ・ゲルゲイ 123

フォーラム「共生／共創の多角的検討」

共生／共創の多角的検討—1 違和感とフラストレーションを起点とした協同的オートエスノグラフィ— 片田真之輔、大川ヘナン、なかだこうじえんりけ 145
共生／共創の多角的検討—2 「共同翻訳」から始まる共生／共創—上辺だけではない議論と実践のために 桂悠介、佐々木美和、八木景之 177

《研究ノート》

介護予防・日常生活支援総合事業における利用者の活動と社会資源—地域のなかの通所型サービスを事例として 寺村 晃 209
私立大学Aにおける留学生の防災力に関する研究—日本人学生と比較して 高 誉文 233
パレスチナを巡る占領政策の一考察—集団的懲罰としての連座刑の視点から 島本奈央 253

《報 告》

未来共生プログラム コミュニティ・ラーニング2020 報告あの日から10年、野田村の想い—改めて考える岩手野田村でのフィールドワーク 石塚裕子、渥美公秀 275
コロナ時代に考える多文化共生—まなびのカフェのイベントを通じて 小笠原理恵、木村友美、坂口ピーター、ゼア・ローズ、クラウドピア・エリウス・オセグダ・フィゲロア 292
G30プログラムと共創の場を目指すために 中野良彦 308
【マイノリティ教育ラボ 活動報告】 コロナ禍における学生のボランティア活動 秋山みき、砂原なごみ、田岡里彩、中西美裕、井上温子 318

《書 評》

平野晋『ロボット法—AIとヒトの共生にむけて』 池田健人 330
Asad Haider, *Mistaken Identity: Race and Class in the Age of Trump* 安藤 歴 334
東畑開人『居るのはつらいよ—ケアとセラピーについての覚書』 富安皓行 338

《エッセイ》

“環境先進国”の見えない代償 岩根あずさ 342
がんとの共生 石蔵文信 346
死に方との共生 山中浩司 350
共生のジャーナリズム」考 脇阪紀行 354
編集後記 木村友美 359



ジャーナル『未来共創』の全原稿はこちらからお読みいただけます。



<https://www.hus.osaka-u.ac.jp/mirai-kyoso/ja/journal>

5 教育事業

◆ 5.1 未来共創センター担当授業

未来共創センターでは、下記の授業を担当しています。

(1) フィールド科目

【学部】 未来共創フィールド実習Ⅰ 春～夏学期

【学部】 未来共創フィールド実習Ⅱ 秋～冬学期

【博士前期課程】 未来共創フィールドスタディⅠ 春～夏学期

【博士前期課程】 未来共創フィールドスタディⅡ 秋～冬学期

(2) 実践型学修活動

【学部】 人間科学学際実習Ⅰ 春～夏学期

【学部】 人間科学学際実習Ⅱ 秋～冬学期

【博士前期課程】 総合人間科学実習Ⅰ 春～夏学期

【博士前期課程】 総合人間科学実習Ⅱ 秋～冬学期

【博士後期課程】 総合人間科学特別実習Ⅰ 春～夏学期

【博士後期課程】 総合人間科学特別実習Ⅱ 秋～冬学期

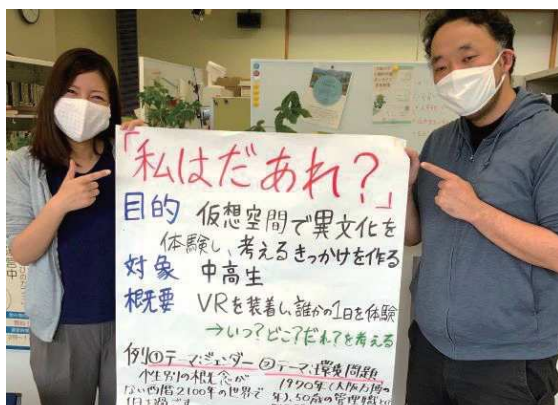


(3) 人間科学学際研究特講

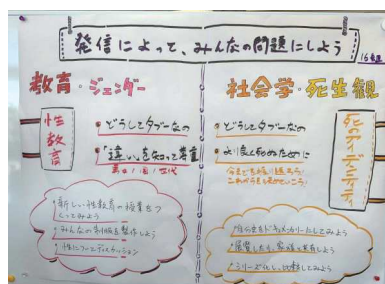


人間科学研究科の学際研究特講において、6時間分の授業を未来共創センターで担当しています。2020年度は、学系をこえたグループにおいて、「大阪万博でどのような共創プログラムができるか？」というお題をもとにディスカッションし、発表がまとめられました。

異なる学問分野の人たちとの「共創」について、その重要性や難しさを、感じてもらえたと思います。



グループからの発表内容の一部と、大賞に選ばれたプロジェクト



◆5.2 シリーズ人間科学の発刊

人間科学研究科附属未来共創センターが中心となり、人間科学にまつわるテーマを多分野の教員で共に執筆した書籍が「シリーズ人間科学」です。2017年3月に第1巻『食べる』を、2018年には第2巻『助ける』、第3巻『感じる』を、大阪大学出版会から刊行しました。「シリーズ人間科学」は人間科学部設立当時からある「人間科学とは何ですか？」という疑問への、現時点における私たちからの回答の一つです。2020年度は、第6巻『越える・超える』を刊行しました。



シリーズ人間科学 6 「越える・超える」

岡部美香 編著／老松克博、野坂祐子、管生聖子、権藤恭之、
白川千尋、川端 亮、青山太郎、高森順子、檜垣立哉、辻 大介、三浦麻子 著

◎内容紹介

私たちの日々の暮らしは、思い通りにはならない「儘ならない」出来事とものごとで溢れている。教育哲学、臨床死生学、老年行動学、臨床心理学、ボランティア学、宗教学、人類学・・・儘ならない世界を前にして、我々はどのように折り合いをつけていけばよいのか。人と人あるいは共同体どうしの間の境界を「越えて」協働することで、また、人力や人知を「超えて」いくことで何とか生きていこうとする人間の奥深さや多様性、そして、そうした人間を主題とする人間科学の研究の幅広さを提示する。

◎目 次

第1部 どうにも儘ままならない〈自分〉を越える・超える

- 第1章 超越機能はイメージを介して現れる
- 第2章 ト라우マ・逆境体験を超える治療共同体
- 第3章 精神と病とつながり
- 第4章 老いの憂いを超える

第2部 合理化された予測可能な〈いま・ここ〉を越える・超える

- 第5章 呪術を理解する—文化人類学的アプローチ
- 第6章 世俗を超える
- 第7章 声なき被災者の経験を被災者に伝える
- 第8章 賭ける—人生の修練としての賭け
- 第9章 オンライン座談会「不透明な時代を〈人間〉としてどう生きるか」

「超える」こととしての人間科学—結びにかえて

◆5.3 『私の一冊』の発行



人間科学研究科の教員が、学生に読んでもらいたい本を一冊ずつ紹介する『私の1冊』を作成し、学生に配布しました。私の一冊は、必修科目「人間科学概論」で使用され、学生たちは掲載された書籍を選んでレポートにまとめて授業で発表しました。本を通じて学生と教員がつながるきっかけとなっています。

6 その他の活動

◆6.1 オンライン出前授業

昨年度までは人間科学部の教員・学生が日本各地の小学校・中学校・高等学校に赴き、出前授業等を行ってきました。今年度もぜひ各地の学校を訪問したいと考えていたのですが、コロナ禍に阻まれて、機会は大きく減ってしまいました。そこで現在大学や高等学校でも頻繁に活用しているZoomを活用して主に高校生を対象としたオンライン出前授業を開催しました。

日 時：2020年11月7日（土）13：00～15：45

参加者：高校生・保護者など約50人

使用ツール：Zoom

スタッフ：

木村友美講師（フィールド栄養学）

山本晃輔講師（教育社会学）

織田和明特任研究員（哲学）

大川和愛（人類学 M1）

西川可奈子（臨床老年死生学 B4）



人間科学って何ですか？

昨年度までは人間科学部の教員・学生が日本各地の小学校・中学校・高等学校に赴き、出前授業等を行ってきました。今年度もぜひ各地の学校を訪問したいと考えていたのですが、コロナ禍に阻まれて、機会は大きく減ってしまいました。

そこで現在大学や高等学校でも頻繁に活用しているZoomで主に高校生を対象としたオンライン出前授業を開催しました。

北海道から九州まで日本各地の人間科学部に興味を持つ高校生に人間科学の諸相を紹介し、次に教員・学生自身の研究や学生生活について語り、そして高校生からの質問に回答しました。

前半ではまず大阪大学と人間科学部について紹介しました。次に山本先生・木村先生・織田がそれぞれの研究について簡単にお話し、学生の大川さんと西川さんも交えて、高校生の皆さんの質問にも答えながら人間科学部の特徴と魅力について語りました。

人間科学部は文理を問わずあらゆる方法を用いて人間についての研究を行っています。今回の出前授業でも自然科学・社会科学・人文科学のそれぞれを軸とするメンバーが集まりました。研究領域のあまりの広さに、高校生の皆さんは驚かれたかもしれません。

5人のプレゼンテーションとディスカッションを通してそれぞれの手法・性格の違いを尊重しつつ丁寧なコミュニケーションによって共に研究を深めていくという人間科学のあり方をお伝えしました。

人間科学部の人と話してみよう

後半は大川さんと西川さんの学生生活や研究の紹介からスタートして、主に高校生の皆さんからの間に答える形で進みました。

大学生になると高校生のころよりと比べて行動範囲がぐっと広がります。海外での活動が豊富な大川さんと支援を受けるの心情についての卒論を準備している西川さんのプレゼンテーションは高校生の皆さんに大学生生活についての具体的なイメージを提供しました。



高校生の皆さんからは大学生活での不安について、さらには留学について、大学卒業後の進路について、さらには自身が今取り組んでいるに実験についてなど、多くの質問を頂きました。回答を通じて人間科学部の多様性を受け止めるという姿勢を示すことで高校生の皆さんの不安の解消にお役に立てたと思います。人間科学部では多様な関心を持つ人がそれぞれに活躍しています。

「学校では、受かるための情報はありますが、実際入ってからどんなことをするのか分からなかったのですが、今日、参加してみてどんなことをしていくのか分かりました」と参加者の方からコメントを頂きました。高校生の皆さんには大学でどのような研究をしているのかを知ったうえで進路選択に臨んでもらいたいと考えています。今回の出前授業を通じて高校生の皆さんの進路選択を支援することができたのであれば幸いです。未来共創センターは今後も学外の方と交流し、相互理解を深めていく場を設けていきたいと考えています。

参加者のコメント 終了後のコメントシートから一部をご紹介します

「現在高校3年生で、受験が近づいてきたこのタイミングで貴重なお話が聞けて、本当に人科に行きたいという気持ちが強くなり、頑張ろうと思えました。チャット等での発言もしやすく、一つ一つ丁寧に取り上げて頂けて、参加して良かったと思いました」

「具体的にどういう研究をされているかを聞ける機会があまりなかったので、常にありがたかったです。北海道に住んでいるので来年以降も続けていただけるとありがたいです」

「人間科学部という名前は聞いたことがあったのですが、色々な範囲の事を学んでいるということは知っていても、どんな研究を行っているかなどはあまり知る機会がありませんでした。なので、今日そういうお話をたくさんしていただいて具体的なイメージを持つことができとても興味が湧きました」

「高一の息子が今日参加できないので、代わりに参加させて頂きました。脳科学に興味があるそうで、調べております。転職したり、色んな職場で働いて、子育てして、いろんな人がいる、いろんな世界があることを経験した、今の立場でこそ、学び直したいと思うような授業でした!!」

「現在進学に関して悩んでおり、なるたけたくさんの情報を得たかったので、非常に興味深く聞かせていただきました。不勉強でお恥ずかしいのですが、人間科学部という学部に対しての認識がかなりあやふやなまま参加させていただきました。それゆえ、ここまで広い分野のことを噛み合わせて学べるのか、という驚きが強かったです。特に、一見文学部の所領でありそうな文学に関わる勉強が可能であるという点には、喫驚の思いを抑えられませんでした。文学・哲学に興味を持っているので、そういったことを学べるというのは、大変楽しそうというように思います」

「オープンキャンパスとは違ったリラックスした雰囲気、研究内容や学生さんの生の声を聴くことができました」

☆スタッフより高校生の皆さんへ

オンライン出前授業は初めての試みでしたが、高校生の皆さんのコメントを読んでニーズがあることがわかりました。ありがとうございました。



◆6.2 センターの活動を紹介する本が出版されました

共生社会のアトリエ 大阪大学大学院人間科学研究科 附属未来共創センターの挑戦

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター 編
2021年3月、大阪大学出版会
ISBN978-4-87259-730-1 C3036



社会の課題に対して実践的に答えるために、大学にできることは――

大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センターでは「未来共生プログラム」や「大阪大学オムニサイト（OOS）協定」などの取り組みで、社会学連携の推進を図ってきた。

本書では教育現場、被災地、地域交流における学びのほか、パートナー協定を結んだ企業、自治体、NPO法人と協働して課題解決に取り組んできたプロセスを描き、解決の手法を具体的に紹介する。社会と連携・協働し、共創知を創出すること、フィールドに出るだけでなく「協働・共生の場そのものを創出」することが、専門家の役割である。未来共創センターの挑戦には、そのエッセンスが詰まっている。

第一部 地域で共生の諸課題の解を探る―大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラム

未来共生プログラムとプラクティカル・ワーク

- | | |
|--------------------|-----------------|
| テーマ1 被災地で学ぶ | テーマ4 共に生きるってなんだ |
| テーマ2 地域にこだわり、地域で歩む | テーマ5 差別に抗う |
| テーマ3 貧困・排除と向き合う | |

第二部 場を創りだし、みなで対話する―大阪大学大学院人間科学研究科附属未来共創センター

未来共創センターと知のキュレーター

- | |
|-------------------|
| テーマ1 大学における共創の場 |
| テーマ2 大学だけではない共創の場 |

◆6.3 阪大写真洗浄のつどい

今回の豪雨被害で甚大な被害を受けた九州地方。熊本県の被災者の方から水で濡れた写真をお預かりしました。持ち主の方の大切な思い出を一緒に洗いましょう！

映画『浅田家！』でも取り上げられる写真洗浄のやり方について、東北・岡山・長野で写真洗浄をしてきた教員が一から手ほどきします。大阪にいても出来ることをやっていきましょう！

日時：9月30日（水）13：00～16：00

場所：未来共創センター



◆6.4 大阪大学賞を受賞しました

大阪大学賞は、本学の大学運営、教育及び研究上において、特に顕著な貢献をした者に対し、その功績を讃えて表彰するものです。そのなかで、「大学運営部門」において、「大阪大学オムニサイト協定とその関連事業の推進」の功績として、山本晃輔講師が受賞しました。

（2020年11月 授賞式の様子）



多様な人が集うことで生まれるイノベーション

私は、NTT 西日本 人事部に所属し、西日本グループのダイバーシティ & インクルージョンの推進に取り組んでいます。昨年よりクロスアポイント制を活用し、本センターに参画させていただきましたが、産学連携による新たな発見、イノベーションを感じることができました。

“異なる環境に身を置くこと”は勇気がいることですが、一歩踏み出すことで、これまでとは異なる世界が広がり、多くの気づきがあります。

社内でも、「ダブルワーク」という仕組みを作り、自分の所属する組織にしながら、新しいフィールドでやってみたい仕事にチャレンジできるようにしています。チャレンジすることで視野や人脈を広げ、多様な考え方を知り、新たな発想・アクションへ・・・、そんなサイクルが自身の成長に繋がっていきます。

企業×大学という、異なるものを掛け合わせることも同じで、それ自体が非常に重要です。企業人として課題に直面する度、試行錯誤しながら何とか対処しているわけですが、そこに、学術的な知見が入ることで、今までとは全く異なるアプローチに気づくことができます。目から鱗の連続ですね。

また、企業で行っている当たり前のことが、大学にとって、新鮮なこともあり、開催させていただいたセミナーでも、多様な人が集い、相互に理解することから生まれる新たな発見とイノベーションを感じ取ることができました。

また、普段は接点のない、学生の方との交流を通じ、生の声を聴くことで、企業と大学との間で、微力ながら支援すべきこととは何か、について、考える機会を得ることもありました。

これからも、“ちがいがこそが価値である”をベースに、企業×大学の接点を大切に、相乗効果を上げていけるよう取り組んでいきたいと思えます。



恒川 あをい

NTT 西日本株式会社人事部ダイバーシティ推進室担当課長、人間科学研究科附属未来共創センター特任准教授

ランチトーク特別編に参加して

宮前良平助教著書出版記念であり、著者自身参加の特別編ランチトークでした。被災地の現場にかかわらせていただいておりますが、「死者」の声を拾うことを指摘していた同書に沿ってコメントをさせていただきました。

現在「コロナ禍」と言われている状況の続いている中で、ランチトークに参加していた私を含めて、参加者が、突然に「今」、「死」を受容できるのでしょうか。自分がもし被災者ならば、もしくは身近なひとが被災し「死」に即座に向きあわざるを得なくなったときに、不条理な「死」に納得できるとは思えません。

これからも未来共創センターでのランチトークでは、平素無意識にやりすごしているような面から、ひとが共に生きようとするときに避けて通りたい点を取り上げてほしいです。ともすれば痛くもかゆくもなく研究にのみ没頭する世界から視座を転換する機会を設け続けてくださることを期待しています。



佐々木 美和

人間科学研究科博士後期課程 3 年

2020 年「グローバルビレッジ津雲台」がスタート

2020 年は、「グローバルビレッジ津雲台」がスタートした年です。共和メディカルグループは、グローバルビレッジの中で4つの事業を運営させて頂いています。一つは「関西薬局」という地域に根差した薬局、二つ目が「日本のいいもの食堂ハレとケ」と併設の「hi-cheese」というケーキ店、三つ目がその人がその人らしく、その人が過ごしたい地域で過ごしていくためのサポートとしての訪問看護事業「あかり訪問看護ステーション」、最後は、地域の方々が、医療従事者へ気楽に相談できる場所を創る「みんなの保健室」事業です。それ以外にも「まちづくり協議会」の一員として、街全体をどのような形でより良くしていくかということをご各社様、大阪大学と OOS 協定を活用しながら、共に協議させて頂いております。

地域住民に愛される街にしていきたい。そのためにも、自分たちの個々の利益のことだけではなく、地域全体のことを考え、地域住民に愛されることで結果的に自分たちもやっていくという善循環なモデルにしたいと考えています。

OOS 協定は、研究者や若い方を通じて、刺激を貰えるような関係性を築くことで、世の中を変えていくような取り組みを発信していく可能性を持っていると思います。



杉浦 万正

共和メディカルグループ
代表取締役

未来共創センターの活動に参加して

今回私は、未来共創センターにて学生スタッフをさせていただき、主にセンター主催のイベントに参加した上での報告書作成や、未来共創センターに関わる学生や団体・企業へのインタビューによる記事の執筆、シンポジウムの企画・運営補助などを担当しました。

イベント参加や学生・団体・企業へのインタビューを通して強烈に感じたのは、関係者の方々の未来を願う強い気持ちでした。この気持ちは関係者の方々がこれまで生きてきた「現場」の中で感じたことがらと切り離せないように思いました。これらのことをお話しされる方々の姿は魅力的で、楽しみながら記事を書かせていただきました。また同時に、強い志を持ったものが集まっているが故の、新しいものを創り上げていく難しさについても、学ばせていただいたように思います。

これから私がどのように生きていくのかについての悩みは尽きません。しかしたくさんの方との出会いから学び、私なりの生き方を見つけていきたいと考えています。



富安 皓行

人間科学研究科
博士後期課程 3 年



発行
大阪大学大学院人間科学研究科
附属未来共創センター
〒 565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-2
2021 年 7 月 31 日

編集・校正協力
特任研究員 織田 和明
特任事務職員 川渕 千恵子

制作・印刷
株式会社一心社



大阪大学大学院人間科学研究科

附属 **未来共創センター**